

岡山大学構内遺跡調査研究年報 1

昭和 58 年度

岡山大学埋蔵文化財調査室

岡山大学構内遺跡調査研究年報 1

昭和 58 年度

岡山大学埋蔵文化財調査室

序

ここに岡山大学構内の埋蔵文化財についての調査成果を初めて刊行することになりました。周知のように本学内外には多数の遺跡が分布しています。代表的な遺跡として津島キャンパスおよび周辺の朝峠鼻貝塚や津島遺跡、農学部演習林内の七つ塙古墳群や中世山城、鹿田キャンパス内の鹿田遺跡などがあげられ、その時期は縄文時代から中・近世におよび、遺跡の性格も貝塚、集落、墳墓、城郭など多岐にわたっています。このように豊かな埋蔵文化財を学内に有することは研究・教育機関として本学にとってまたとない財産であり、その積極的な活用が求められましょう。また同時に本学周辺の市街化による環境変化が著しい現在にあっては、特に本学に残された自然環境と埋蔵文化財の保全も大学としての重要な役割であります。

幸い本学において近年各種施設の新政策や排水基幹整備が進む過程で、大学施設の整備充実と文化財の保護活用を調和させようという機運が高まり、主体的な調査研究と保護活用をめざして昭和58年3月に埋蔵文化財調査室が設置されました。

埋蔵文化財調査室の本年度の調査成果は本年報に示されたように予想以上のものがあります。これは学内、学外の多大な協力と調査室職員の努力の賜物であります。今後も文化財の保存と活用をめざして関係諸氏の活躍を期待する次第です。

末尾になりましたが、昭和58年度は調査室活動の本格的な開始の年にあたり、多くの方々から指導、助言、協力を得ました。特に岡山県教育庁文化課・総務部県史編纂室、岡山市教育委員会文化課、本学文学部考古学研究室、埋蔵文化財保護対策検討専門委員会、並びに本学関係各位に一方ならず御援助をいただきました。茲にあらためて各位に深謝いたします。また今後の一層の協力と援助をお願いする次第であります。

昭和60年1月20日

岡山大学長 大 藤 真

例　　言

- 1 本年報は岡山大学構内において昭和58年4月から59年3月末日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および岡山大学埋蔵文化財調査室の活動成果をまとめたものである。
- 2 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、国土座標を測量等の基準としているが、岡山大学津島地区と同鹿田地区ではその設置基準を次のように定めた。
 - 1) 岡山大学津島地区では、国土座標第5座標系 ($X = -144,500$, $Y = -37,000$) を基点とし、一辺50mの方形の地区割をして遺跡の位置を表示した。また、津島キャンパスは調査の便宜上、津島北地区と同南地区に二分する(図版2)。
 - 2) 岡山大学鹿田地区では、国土座標第5座標系 ($X = -149,800$, $Y = -37,400$) を基点とし、座標軸を N15°E に据ったものを構内座標とする。地区割は一辺5mの方形を用い、調査に対応した(図版1)。
- 3 本文中で用いる方位は鹿田地区は真北を、津島地区は磁北を使用している。
- 4 岡山大学構内及び関連施設内の遺跡の名称は、農学部演習林内に分布する古墳群等の周知の遺跡の場合、そのまま踏襲する。沖島地区構内で新たに発見された遺跡は、遺存する小字名を用いるか、津島岡山大学構内遺跡と仮称し、地点ごとに任意の記号を用いて示す。また、鹿田地区は全城をこれまで用いられてきた「鹿田遺跡」を使用する。
- 5 木書で使用した遺構の略号は次のとおりである。SB：住居址・掘立柱建物、SE：井戸・野窓、SK：土壤墓・土壙、SD：溝、SA：樋状遺構・柱穴列、SX：その他
- 6 遺構・遺物の実測と整図は、青木進治郎、家田淳一、五十嵐直志、池上博、池橋幹、伊藤真、今津啓子、大久保徹也、小池幸夫、小池伸彦、小池やよい、駒井正明、柴一郎、鈴木英男、鈴木康之、高井健司、田中裕介、南摺正、千葉豊、新納泉、斎元洋、八谷隆生、馬場洋、平井典子、北條芳隆、松井潔、宮原博幸、安井ともえ、山田雅子、山本悦世、吉留秀敏、吉村健、力竹孝典がおこなった。遺物の撮影は柴一郎、吉留秀敏がおこなった。
- 7 本文は、小池伸彦、平井典子、山本悦世、吉留秀敏が分担執筆した。執筆者名は文末に記した。
- 8 編集は近藤義郎の指導のもとに吉留秀敏、山本悦世、柴一郎が当った。
- 9 本年度の発掘調査・整理において本学考古学研究室の稻田孝司、宇垣国雅両氏の援助をうけた。記して深謝したい。

岡山大学構内遺跡調査研究年報1 昭和58年度

目 次

第Ⅰ部 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1	岡山大学埋蔵文化財調査室設置に至る経過	1
2	岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程	1
3	岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項	2
4	昭和58年度普及活動	3
5	岡山大学構内のこれまでの調査（昭和55年度以降）	4

第Ⅱ部 昭和58年度岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第1章	昭和58年度岡山大学構内遺跡調査の概要	5
第2章	鹿田遺跡 BG・BH19～21区の発掘調査概要	7
第3章	鹿田遺跡 AU～BD28～39区の発掘調査概要	11
第4章	津島 BH13区の発掘調査概要	18
第5章	津島 BE14・18、BF17・18、BG14、 BH13～15区の発掘調査概要	21
第6章	昭和58年度岡山大学構内の試掘・立合調査報告	25
第7章	昭和58年度構内遺跡調査のまとめ	29

挿図目次

図1 調査区東壁の層序	7
図2 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構	8
図3 井戸SE7と出土遺物	8
図4 古代の遺構	9
図5 井戸SE4と出土遺物	9
図6 中世の遺構	10
図7 井戸SE3と出土遺物	10
図8 調査区西側の層序	11
図9 古代の遺構	12
図10 住居址SB7	12
図11 SB7の出土遺物	13
図12 井戸SE21と出土遺物	14
図13 中世の遺構	15
図14 井戸SE17・SE14	16
図15 SE17出土遺物、SE14出土遺物	17
図16 調査区西壁の層序	18
図17 弥生時代の遺構	19
図18 津島B H13区の出土遺物	20
図19 A地区遺構検出状態	21
図20 A地区東壁の層序	21
図21 A地区的出土遺物	22
図22 B地区的遺構と遺物の出土状態	23
図23 B地区的出土遺物	23
図24 弥生時代の遺構	24
図25 C地区的出土遺物	24
図26 津島地区の試掘調査配図	25
図27 試掘調査の土柱状図	26
図28 蒸気配管埋設予定地貝層検出状態	28
図29 蒸気配管埋設予定地東壁土層図	28
図30 出土遺物	28

表 目 次

表1 岡山大学構内のおもな調査	4
表2 昭和58年度の発掘調査	6

図 版 目 次

図版1 鹿田地区全体図と調査地点

図版2 津島地区全体図

図版3 鹿田遺跡B G・B H19~21区

1 中世・古代遺構全景(南から) 2 井戸S E 3(東から)

図版4 鹿田遺跡B G・B H19~21区

1 井戸S E 3と杭列S A 1(東から) 2 S E 3出土遺物 3 井戸S E 4井筒
(北から) 4 S E 4出土遺物

図版5 鹿田遺跡B G・B H19~21区

1 弥生時代遺構全景(南から) 2 井戸S E 7(西から) 3 S E 7出土遺物

図版6 鹿田遺跡A U~B D28~39区

1 調査開始段階(東から) 2 溝S D 4(南から) 3 井戸S E 14(南から)

図版7 鹿田遺跡A U~B D28~39区

1 井戸S E 17井筒(東から) 2 S E 17出土遺物

図版8 鹿田遺跡A U~B D28~39区

1 建物S B 11(東から) 2 井戸S E 4井筒出土状況(西から)

図版9 津島B H13区

1 弥生時代遺構検出状況(南から) 2 出土遺物

図版10 津島B E 18, B F 17・18区

1 調査区全景(北から) 2 出土遺物

図版11 津島B E 14区

1 中世遺構全景(東から) 2 土層(西壁) 3 出土遺物

図版12 津島B G 14, B H13~15区

1 調査区全景(北から) 2 出土遺物

図版13 鹿田遺跡A X~A Z 22区

1 包含層検出状態(南から) 2 出土遺物(1) 3 出土遺物(2)

第Ⅰ部 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1 岡山大学埋蔵文化財調査室設置に至る経過

岡山大学構内の埋蔵文化財の調査は、昭和53年に岡山市教育委員会（以下市教委とする）が実施した岡山大学医学部附属病院臨床研究棟および講義棟の新営工事の立合調査に始まる。以来、構内の工事に際しては市教委の指導を受け、埋蔵文化財の破壊のないように努めている。

しかし、昭和56年9月に医学部附属動物実験施設新営工事について市教委へ文書連絡をおこない、市教委より事前に確認調査を実施する旨通知を受けたが、市教委への確認調査の依頼を怠り、未調査のまま同年11月16日～28日に掘削を進めてしまった。この事実は同年12月25日に動物実験施設に隣接した病理解剖体臓器処理保管庫新営工事について市教委と連絡をとった際に市教委より指摘され、今後の慎重な対応を求められたのである。

本学ではこの件の反省のうえに昭和57年2月25日付で岡山大学施設設定委員会に埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下専門委員会とする）を設置し、構内の埋蔵文化財の保護、調査等の対応に備えた組織上の整備を進めた。なお、同年3月26日におこなわれた専門委員会会議では、学内独自の埋蔵文化財の保護および調査機関として埋蔵文化財調査室の設置が審議された。

その後同年9月29日に市教委ならびに岡山県教育委員会が実施した医学部附属病院外来診療棟改築予定地の確認調査で遺構と遺物包含層を、また同年10月4日に市教委が実施した津島地区排水基幹整備工事とともにうポンプ室予定地の確認調査で遺物包含層をそれぞれ検出した。これらの調査結果より学内において埋蔵文化財調査室の早急な設置の必要性が再確認された。

昭和58年3月1日に岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項が制定され、専門委員会に室長1名、助手1名による埋蔵文化財調査室が設置され、学内の埋蔵文化財の保護・研究・調査活動に従事することになった。

2 岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程

第1条 岡山大学施設設定委員会規程（昭和41年岡山大学規程第3号）第9条の規定に基づき、岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

第2条 専門委員会は、岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の保護対策について必要な事項を審議する。

第3条 専門委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 各学部長及び教養部長のうちから互選された者1人

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

- 二 施設設定委員会委員のうちから各学部及び教養部ごとに推薦された者1人
- 三 専門的知識を有する本学の教官のうちから2人
- 四 その他学長が必要と認めた者

第4条 専門委員会に委員長を置き、前条第1号の委員をもって充てる。

第5条 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

- 2 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

第6条 委員長が必要があると認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

第7条 専門委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長、施設部長及び学生部次長をもって充てる。

第8条 専門委員会の庶務は、施設部において処理する。

附則 この規程は、昭和57年2月25日から施行する。

委員長 新見嘉兵衛（医学部教授）昭和58年6月まで

” 緒方正名（医学部教授）昭和58年7月から

委員吉田晶（文学部教授） 小川勝士（医学部教授）

近藤義郎（文学部教授） 小田嶋梧郎（歯学部教授）

稻田孝司（文学部助教授） 大和正利（薬学部教授）

難波良司（教育学部教授） 中島利勝（工学部教授）

稻田陽一（法学部教授） 益田忠雄（農学部教授）

浦田昌計（経済学部教授） 成田英夫（教養部教授）

山田宰（理学部教授）

幹事藤嶋茂（庶務部長） 浜中敬三（経理部長）

中岡善吉（施設部長）

山下彰三（学生部次長）昭和58年9月まで

島田祥生（ ” ）昭和58年10月から

3 岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項

- 1 岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」という。）に、岡山大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。
- 2 調査室は、専門委員会に必要な資料を提供するため、岡山大学の敷地内の埋蔵文化財に関する次の業務を行う。

- 一 保護、調査、発掘等の実施計画の立案に関すること。
 - 二 保護、調査、発掘等の実施に関すること。
 - 三 保護、調査、発掘等の報告書の作成に関すること。
 - 四 その他必要な事項。
- 3 調査室に、室長及びその他必要な職員を置くことができる。
- 4 この要項は、昭和58年3月1日から実施する。

室 長(併) 近 藤 義 郎 (文学部教授)

室 員(専) 吉 留 秀 敏 (文学部助手)

(専) 山 本 悅 世 (技術補佐員)

(専) 平 井 典 子 (技術補佐員) 昭和58年8月1日から

(専) 新 納 泉 (技術補佐員) 昭和59年1月9日から

4 昭和58年度普及活動

対策、検討及び普及活動

昭和58年9月27日 鹿田遺跡 岡山大学埋蔵文化財保護対策検討専門委員会現地見学会

昭和58年10月19日 鹿田遺跡 岡山大学埋蔵文化財保護対策検討専門委員会現地見学会

昭和58年10月29日 鹿田遺跡現地説明会

昭和59年2月25日 津島岡山大学構内遺跡現地説明会

埋蔵文化財調査室刊行資料

昭和58年10月29日 岡山大学構内遺跡現地説明会資料（鹿田地区医学部附属病院外来診療棟予定地）

昭和59年2月25日 岡山大学構内遺跡現地説明会資料（津島地区排水基幹整備関係）

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

5. 岡山大学構内のこれまでの調柶（昭和55年度以降）

表1 岡山大学構内のおもな調柶

年 度	遺跡名 調柶地名	調柶の種類	調柶組織 担当者	調柶面積 (m ²)	文 献	備 考
昭和55 年度	鹿田遺跡	立合調柶 文化部、同附属病院棟新築工事	岡山市教育委員会	8.0		
昭和56 年度	津島南地区 BD-26区	立合調柶 文化部構内宿舎新築工事	岡山市教育委員会			
		立合調柶 文・法・経済学部構内合併地盤整備工事	岡山市教育委員会			
	津島南地区 BC-09～11, BD-09区	立合調柶 津島地区基幹整備（共同 実施取付）工事	岡山市教育委員会			
	津島南地区 BD-08～09 ～07区	立合調柶 津島地区陸上競技場改修 (配水管設工事) 工事	岡山市教育委員会			
	鹿田遺跡	立合調柶 医学部附属病院高気圧浴槽新築工事	岡山市教育委員会			
	鹿田遺跡	立合調柶 医学部附属病院動物実験施設新築工事	岡山市教育委員会 岡山市公会堂 岡山市教育委員会			試掘調柶をせず破壊 既存壁面等の調柶
	鹿田遺跡	立合調柶 呑嚙部附属病院病理解剖 体験器処理保管庫新築工事	岡山市教育委員会			
	鹿田遺跡	立合調柶 医学部運動場改修工事	岡山市教育委員会			
昭和57 年度	津島南・北 BD-8, AV06- 10, AW05-14, AX08, BD- 07, BS-10区	試掘調柶 津島地区排水基幹整備工 事	岡山市教育委員会			津島 AW14区で弥生時代包含層 を確認。協議
	小幡遺跡 津島北地区 AW-14区	発掘調柶 法・文学部構内排水管生 中権(NPL)埋設工事	岡山大学	24.0		
	津島南地区	試掘調柶 津島地区式造館新築工事	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北地区 AY15-16区	試掘調柶 法・経済学部校舎新築工 事	岡山市教育委員会	7.0		
	鹿田遺跡	試掘調柶 医学部標本保存庫新築工 事	岡山県教育委員会	6.0		
	鹿田遺跡	試掘調柶 医学部附属病院外来診療 棟改築工事	岡山市教育委員会 岡山県教育委員会	4.0	2	
	鹿田遺跡	立合調柶 医学部附属病院施設追加 排水管、ガス管埋設工事	岡山市教育委員会		1	
	鹿田遺跡	立合調柶 文化部電話ケーブル埋 設工事	岡山市教育委員会 岡山県教育委員会 岡山市公会堂 岡山市埋蔵文化財調査室			
	鹿田遺跡	立合調柶 医学部附属病院施設改築 り撤下スロープ取付工事	岡山大学 埋蔵文化財調査室			
	七ツ塙古墳 群島地区 BD-BC41- 42区	発掘調柶 文学部演習林内	岡山大学 考古学者 教室		3	

文献 1 光永吉一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新築工事に伴う配水管設工事に伴う立合調柶」「岡山県埋蔵文化財報告」13 1983 岡山県教育委員会

2 河本 清「岡山大学医学部附属病院外来棟改築に伴う確認調柶」「岡山県埋蔵文化財報告」13 1983 岡山県教育委員会

3 岡山大学七ツ塙古墳群調柶「七ツ塙古墳の調柶」「考古学研究」115 1982 考古学研究会

(古留秀敏)

第Ⅱ部 昭和58年度岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 昭和58年度岡山大学構内遺跡調査の概要

昭和58年度には以下のように試掘調査8件、発掘調査4件、立合調査18件の計30件を実施した。なお、地区別の内わけは鹿田地区14件、津島地区15件、その他1件である。

試掘調査

農学部構内合併処理槽埋設予定地（津島南地区 B H13区）

農学部構内排水用中間ポンプ槽埋設工事（津島南地区 B F17区）

農学部構内排水管埋設予定地（津島南地区 B C18, B E14・15・18, B F14～18, B G14, B H14・15区）

農学部農場柵合新築予定地（津島南地区 B F22・23区）

大学事務局改築予定地（津島南地区 B C15, B D15区）

保健管理センター改築予定地（津島南地区 B B10区）

岡山大学津島宿泊所改築予定地（津島南地区 B I 16区）

工学部校舎増築予定地（津島北地区 A W05区）

発掘調査

医学部附属病院外来診療棟改築予定地（鹿田地区 A U～B D28～39区）

医学部附属病院NMR-C T室新築予定地（鹿田地区 B G・B H19～21区）

農学部構内排水管埋設予定地（津島南地区 B E14・18, B F17・18, B G14, B H14・15区）

農学部構内合併処理槽埋設予定地（津島南地区 B H13区）

立合調査

教育学部附属中学校改築予定地（岡山市東山2丁目）

医学部附属病院外来診療棟及び旧耳鼻眼科棟基礎杭保存状況確認調査（鹿田地区 A R38, B C40区）

医学部附属病院中央診療棟、北病棟排便管工事（鹿田地区 B S26区）

文学部中庭水銀池地下ケーブル埋設工事（津島北地区 A X15区）

医学部附属病院旧中央診療棟埋設給水管修繕工事（鹿田地区 A X23区）

医学部附属病院外来診療棟シールド取付に伴うアース線埋設工事（鹿田地区 A L32区）

医学部附属病院旧耳鼻眼科棟水道管修繕工事（鹿田地区 A M～B B40区）

医学部附属病院ブール周辺樹木作業（鹿田地区 D D40～43区）

医学部動物実験棟周辺樹木作業（鹿田地区 B D58～65区）

医学部旧基礎医学棟ガス管埋設部分腐蝕検査（鹿田地区 A O57区）

医学部附属病院外来診療棟蒸気配管埋設工事（鹿田地区 A O～A Y22区）

薬学部周辺排水川集中槽埋設、水道管埋設工事（津島南地区 B C・B D18区）

津島地区西門橋梁改修工事（津島北地区 B A13区）

昭和58年度岡山大学構内遺跡発掘調査報告

薬学部本館前地下ケーブル埋設工事（津島南地区B C16区）

医学部附属病院NMR-C T室関係排水管埋設工事（鹿田地区X B H17・18区）

医学部附属病院看護婦宿舍水道管修繕工事（鹿田地区C V・C W29区）

医学部附属病院混合病棟ガス管理設工事（鹿田地区X B B16～21区）

農学部圃場整備事業・津島地区排水基幹整備に伴うもの（津島南地区B F～B I 18～22、B E・B F22～25区）

以上のうち、農学部・薬学部構内の排水関係の調査は、本年度が津島地区排水基幹整備事業の最終年にあたり、当地区の排水管路および処理施設の埋設工事に対応したものである。この中で試掘、立合調査は、未確認の埋蔵文化財を破壊することの無いよう注意した。調査の結果、合併処理槽と排水管路の工事予定地に遺物包含層と遺構を検出した。協議の結果、工法変更などによる保存対策の困難な部分については、発掘調査を実施した。

鹿田地区的立合調査では、各工事にあたり埋蔵文化財への影響が生じないよう指導した。また、遺物包含層や遺構の破壊されるおそれのあるあった医学部附属病院外来診療棟蒸気配管の埋設工事においては、関係者と協議し工法変更により埋蔵文化財に影響を与えないよう指導した。

なお、本年度に実施した発掘調査の期間・面積等は以下の通りである。

表2 昭和58年度の発掘調査

遺跡名	地区	期間	面積(m ²)	備考
鹿田遺跡	鹿田地区AU～BD28～39区 外来診療棟改築予定地	1983.7.27～11.22 1984.1.9～3.31	2,188	昭和59年度に 継続
〃	鹿田地区X BG～BH19～21区 NMR-C T室新築予定地	1983.8.1～12.30	176	
津島岡山大学構内遺跡	津島南地区BE14・18, BF17・18, BG14, BH14・15区 排水管埋設予定地	1984.1.9～3.5	265	
〃	津島南地区BH13区 合併処理槽埋設予定地	1983.11.14～11.22 1984.1.9～3.5	276	

（吉留秀敏）

第2章 鹿田遺跡 BG・BH19~21区の発掘調査概要

1 調査の経過

本調査区は医学部附属病院の北東部にあたり、中央診療棟及び北病棟と混合病棟の間に位置する。ここにNMR-C T室が建設されることになり、旧中央診療棟を挟んだ外來棟改築予定地の試掘調査からみて本地区にも遺物包含層の存在が予想されたことから、発掘調査を実施した。調査面積は176m²で昭和58年8月1日に調査を開始し、同12月30日に終了した。

2 層序

鹿田遺跡においては過去の調査の結果も踏まえて大きく第Ⅰ～Ⅷ層の基本層序を設定しているが、本地区では中世の包含層である第Ⅲ層は削平され消失している。調査区内の層序は全域でほぼ一様な堆積であった(図1)。第Ⅰ層は表土及び造成上で約0.8mの厚さをもち、現地表面はほぼ平坦で標高は2.6m前後である。第Ⅱ層(青灰色砂質土)は近代の水田土壤である。第Ⅳ層(灰緑～茶灰色微砂土)は、ほぼ水平な堆積状況を示し、鉄分の量により上下に二分される可能性がある。本層中には、第Ⅲ層から掘り込まれたと推定される古代末～中世の遺構が存在している。第Ⅴ層(茶灰～暗褐色微砂土)は弥生時代中期～古墳時代初頭の包含層である。第Ⅵ層(黄褐色微砂土)・第Ⅶ層(暗灰色シルト)・第Ⅷ層(暗灰～青灰色砂)は無遺物層と思われる。第Ⅸ層は湧水層であり、各時期の井戸はこの第Ⅸ層まで掘削している。

3 弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構と遺物

第Ⅴ層中より検出した遺構は、竪穴式住居址1、溝7、井戸3、土壙113、ピット124を数

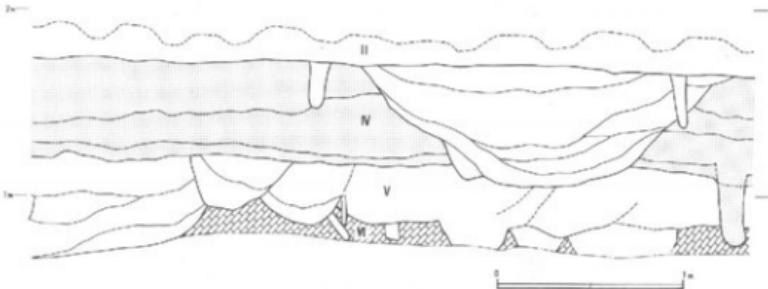


図1 調査区東壁の層序 縮尺1/30

鹿田遺跡 BG・BH19~21区の発掘調査概要

え、それらは弥生時代後期後半を主体とし、古墳時代初頭にまで及ぶものである(図2、図版5-1)。弥生時代中期の土器片も出土しているが、該期の遺構は確認しえなかつた。住居址SB2は調査区の南隅に壁構の一部のみ検出した。不明確ではあるが、径4~5m前後の比較的小規模の円形プランの壘穴式住居址と思われる。井戸SE7は調査区の東側に位置し、深さ0.8~1.0m、深さ1mを測る(図3左、図版5-2・3)。埠土下層より弥生時代後期の一括遺物が出土した(図3右)。壺(1・2)、高杯(3・4)、鉢(5)、甕(6)等がその主なものである。その他の注目すべき遺構として土器等を多く廃棄した井戸(SE5・6)や炭と共に製塩土器の小片を廃棄した土壤などがあげられる。

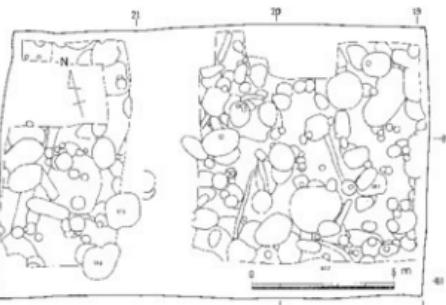


図2 弥生時代後期~古墳時代初頭の遺構 縦尺1/200

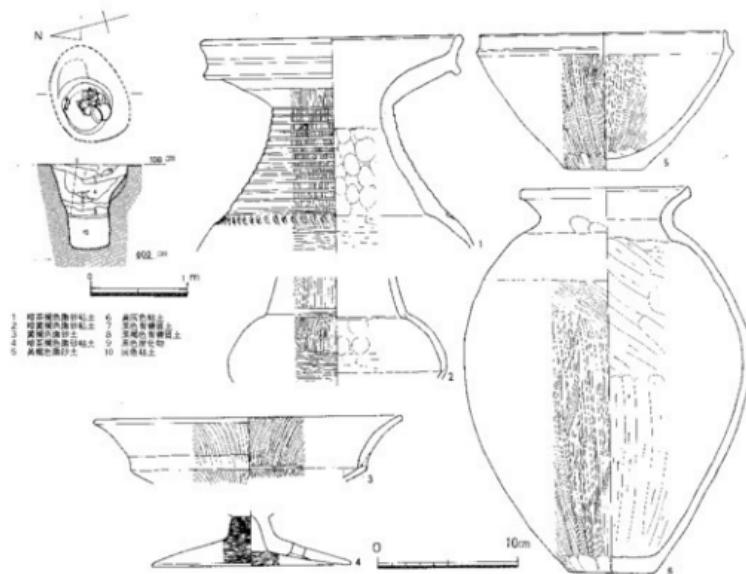


図3 井戸SE7と出土遺物 縦尺1/60, 1/4

4 古墳時代後期の遺構と遺物

該期の遺構は少ない。堅穴式住居址 S B 1 は壁の一部を確認したのみで、規模・プラン等は不明である。

5 古代の遺構と遺物

この時期の遺構として、溝 4、井戸 1、柱穴列 1 を検出した（図 4、図版 3-1）。溝はいずれも検出面から非常に浅く、部分的にしか確認できなかった。井戸 S E 4 は調査

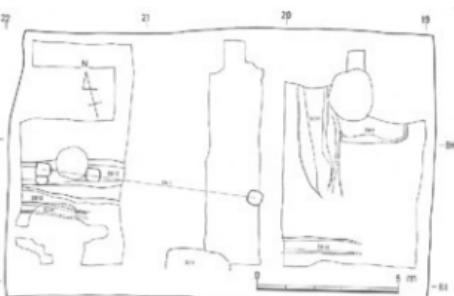


図 4 古代の遺構 縮尺 1 / 200

区南端に約 1.4 m を検出した（図 5 左）。掘形の平面形はほぼ方形で東西約 1.9 m、深さ約 2.1 m を測る。掘形内には径約 0.8 m、長さ約 2 m の巨木を半割し、くり抜いたものを二つに合わせた井筒が残存していた（図版 4-3）。井筒内埋土中からは、平安時代前半の遺物が出土した（図 5 右）。須恵器杯身（1～3）、土師器皿（4）、須恵器杯蓋転用鏡（5）、須恵器壺底部（6）、横櫛、木筒等がみられる。このうち 1・2 には外面に墨書きが施されている。4 は黒色土器 A類に相当する。木筒は保存が悪く、文字の判読是不可能であった。柱穴列 S A 1 は一部溝 S D 7・8 によって消失しているが、4 間分の柱穴の存在を推定できる（図版 4-1）。

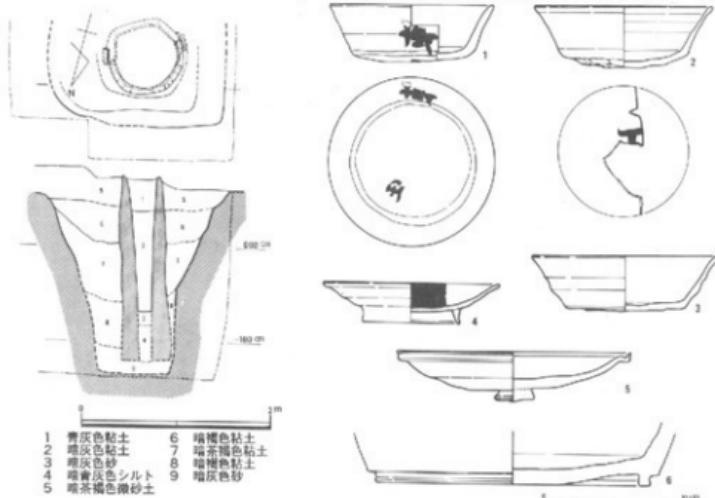


図 5 井戸 SE 4 と出土遺物 縮尺 1 / 60, 1 / 4

鹿田遺跡 BG・BH19~21区の発掘調査概要

個々の柱穴の掘形は一辺約0.5mのほぼ正方形を呈する。柱痕跡の残存するものもあり、建物の一部を構成していたものと思われる。

6 古代末～中世の遺構と遺物

遺構は第N層上面から検出し、溝5、井戸2、土壙10、ピット135を数える(図6、図版3-1)。溝はほぼN15°E方向に走るSD7・8とほぼそれに直交するSD5・6とを検出した。その中でSD8は鎌倉時代後年に埋没し、その後SD7が室町時代にSD8を切って掘削され、以後近代に至るまで利用されていたものと思われる。井戸SE3は調査区西側に位置し、径約1.2m、深さ2.2mを測る(図7左、図版3-2, 4-1・2)。

埋上中より鎌倉時代後半の一括遺物が出土した(図7右)。土師質碗(1-6)、土師質小皿(7)、白磁碗(8)、青磁碗(9)等がみられる。また、溝SD5の西側には土壙が集中し、土壙内からは土師質碗、土師質小皿、獸骨等が出土している。

(平井典子、吉留秀敏)

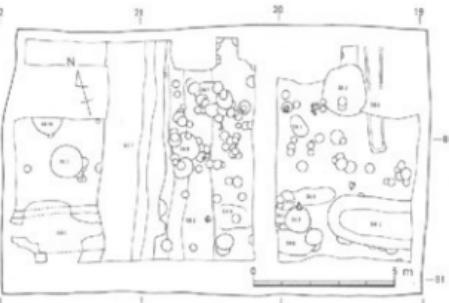


図6 中世の遺構 緯尺1/200

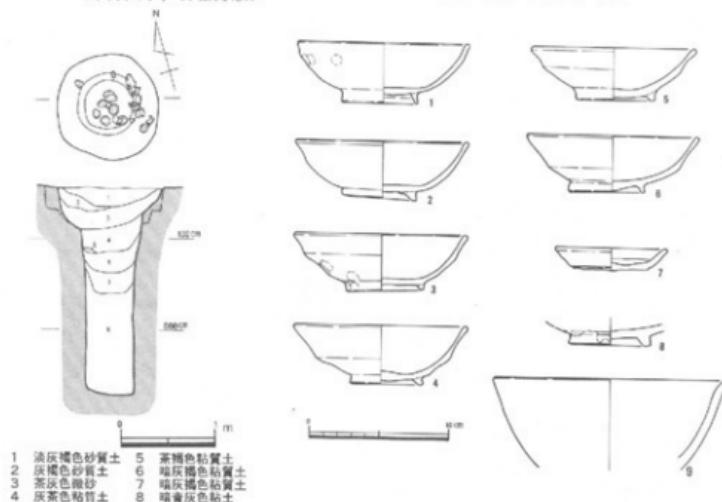


図7 井戸SE3と出土遺物 緯尺1/60, 1/4

第3章 鹿田遺跡AU～BD28～39区の発掘調査概要

1 調査の経過

本調査区は医学部附属病院の北側に位置する。外來診療棟を本地区に改築することになり、昭和57年に岡山県文化課が主体となり2ヶ所の試掘場を設け遺跡の確認と層序の観察を実施した。その結果、中世の遺構及び遺物包含層と弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片を確認した。これにより改築予定地全域の発掘調査を実施することになった。

本年度の調査期間は昭和58年7月27日から同年11月22日、その後一時の中断を経て、昭和59年1月9日から同年3月31日までであり、調査はその後次年度に継続している。調査面積は2188m²である。また、調査期間中の昭和58年10月29日に現地説明会をおこなった。

2 層序

現地表の標高は2.6～2.7mではほぼ平坦である。本地区でもBG・BH19～21区と同様に、第I層～第Ⅲ層の基本層序を設定した。そのうち第Ⅲ層は調査区全域で、第Ⅳ層は調査区南～西側でそれぞれ近世の開田に伴う削平を受け、失っている。さらに、ボーリング調査の結果、第Ⅲ層より下部では第Ⅹ層（暗灰色シルト）、第Ⅸ層（砂混りシルト）、第Ⅷ層（青灰色砂礫）の層序を認めた。第Ⅹ～Ⅷ層は水成堆積層であり、第Ⅷ層を標高-20m前後まで確認した。

3 古墳時代後期の遺構と遺物

この時期の遺構は第Ⅳ層中位から第Ⅶ層上面で検出した。遺構には竪穴式住居址3、土壙4、不明遺構3がある（図9）。

住居址SB7は調査区東側のAZ30区付近で検出した（図10）。北側を攪乱によって破壊されているが、平面形は3.0×4.5mの長方形を呈している。検出面から床面までの深さは15cmを測る。壁溝は西側で一部を確認した。床面では6柱穴を検出したが、その配置から本住居址は四本柱で、後に建て替を受けたものと判断される。住居址中央部分では浅い土壙を検出した。埋土上部に固くしまった燒土を含んでいる。住居址埋土及び床面上からは7世紀初頭の遺物が出土している（図11）。須恵器には

杯蓋（1・2）、杯身（3・4）、腹（5）、高杯（6）、甕（14）などが
ある。土師器には碗（7～10）、高杯（11・12）、甕（13）などがある。
住居址SB8・9は平面形も床面も明確には検出できなかった。土壙には大形のプランをもち、埋土中に多

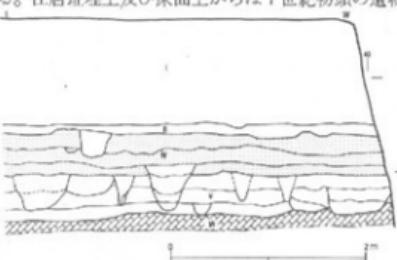


図8 調査区西側の層序 縦尺1/60

鹿田遺跡 A U～B D28～39区の発掘調査概要

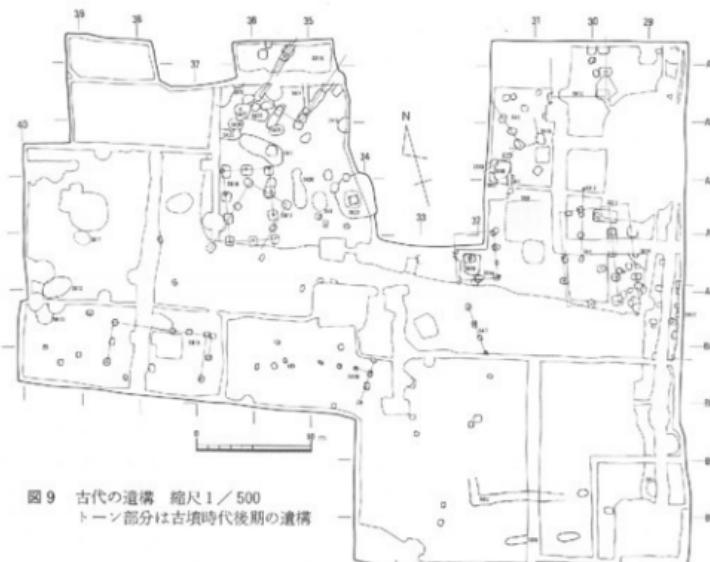


図9 古代の遺構 総尺1/500
トーン部分は古墳時代後期の遺構

量の遺物を含むSK9・12と、や
や規模の小さいSK10・13がある。

4 古代の遺構と遺物

この時期の遺構は第IV層中位で
検出した(図9)。調査区内の西側と南側が後世に行なわれた水田
耕地の造成によって大きく削平さ
れており、比較的浅い遺構はすで
に失われたと考えられる。遺構は
掘立柱建物10、井戸1、溝4、土
壙12、ピット86、杭列2がある。
遺物は井戸、柱穴、土壙などから
出土しているが全体に少なく、大
半が奈良後期から平安前期のもの
である。

掘立柱建物は主軸方向から大き



図10 住居址SB7 総尺1/60

く次の3群に大別できる。A群：主軸方向N40°～70°E 2×3間以上（SB 9・15・17），B群：主軸方向N5°～10°E 2×3間（SB 10・14・16），C群：主軸方向N20°～35°E 2×5間（SB 18），不明（SB 12・19）。また、柱穴掘形の形態などにも、これらの3群に差がみられる。SB 16・17間には切り合関係が存在し、SB 17→SB 16の建築順を考えることができる。溝は浅く部分的にしか検出されていないが、いずれも掘立柱建物B群の主軸方向に一致する。井戸SE 21は調査区のはば中央AX34区付近で検出した。大形で井筒をもっている（図12左、図版8-2）。掘形の平面形は3.0×3.6mのおおよそ隅丸方形を基とし、段掘りで底の標高は-1.8mである。井筒は径1.0m、残存長2.5mで上面観が六角形をなす割竹状のくりぬき材を用いている。さらに井筒上部には、後代の改修による木組方形隅柱型の井側の痕跡が

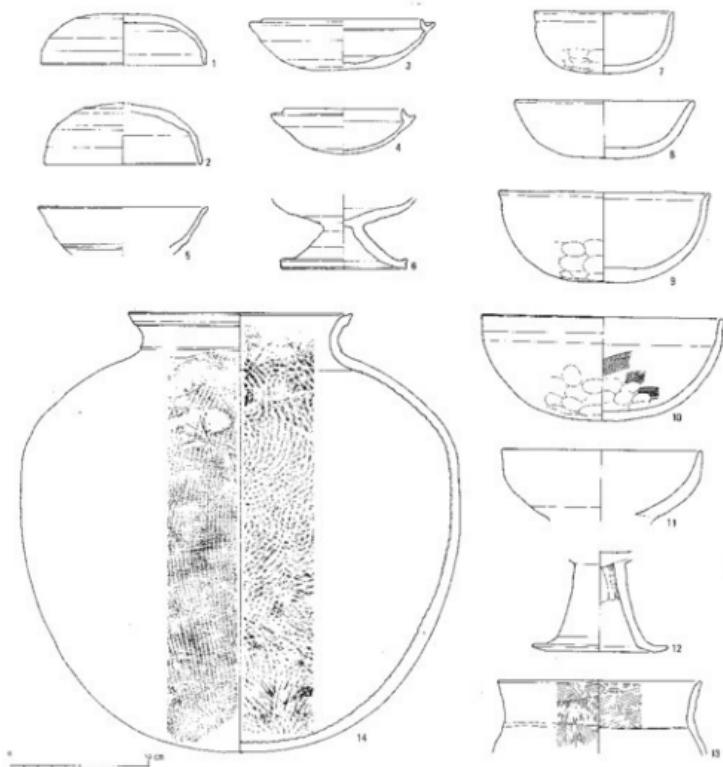


図11 SB 7の出土遺物 縦尺1/4

鹿田遺跡 A U～B D28～39区の発掘調査概要

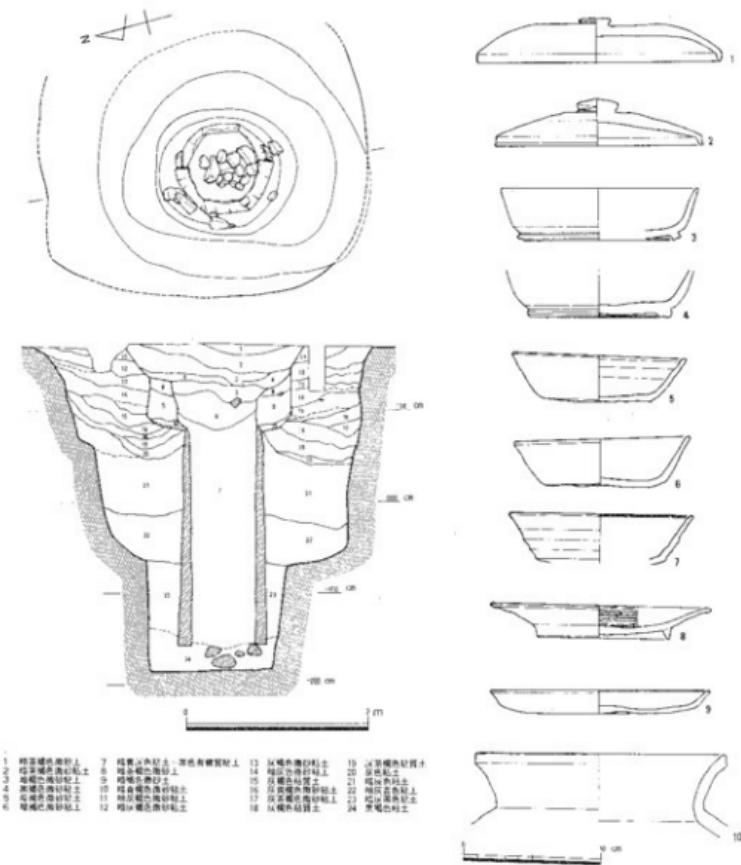


図12 井戸SE21と出土遺物 縮尺1/60, 1/4

認められる。遺物には須恵器の杯蓋(図12右1・2), 杯身(3～7), 土師器皿(8・9), 鉢(10)や曲物などがある。奈良後期～平安前期に属している。

5 古代末～中世の遺構と遺物

この時期の遺構は第Ⅳ層上部で検出した(図13)。古代の遺構と同様に水田化により削平を受けている。遺構は掘立柱建物6, 井戸13, 溝3, 杭列1, 土壙5, ピット185がある。

掘立柱建物には規模の小さいSB3～6と柱径でやや大きいSB1・2がある。井戸は調査

区西側に多く分布し、大形のものがみられた。井戸 S E17は調査区西側隅で検出された平安後期のものである(図14左、図版8-1)。井戸掘形の平面形は一辺約1.4mの隅丸方形であり、深さは標高-1mまで及んでいる。上部は埋没の過程で大きく拡がっている。掘形に沿って一辺0.8mの木組方形隅柱型の井側を据えていた。埋土上部より遺物が一括出土している(図15上、図版8-2)。土師質楕(1~3)、瓦器楕片(4)、土師器皿(5~7)、白磁(8~9)、鍋(10)などがある。井戸 S E14は調査区西側のA X37付近で検出された(図14右、図版6-3)。平安末期に属する。井戸掘形の平面形は不整橈円形で、2.4×1.7mを測る。深さは標高-1.3mまで及んでいる。埋土上部には多量の一括遺物がみられ、下部からも曲物容器などの遺物が出土した(図15下)。土師質楕(11~12)、瓦器楕片(13)、土師器皿(14~17)、白磁(18~20)、須賀質の鉢(21)、壺(22)、甕(23)などがある。鉢は魚住模を含む東播系のものであり、壺・甕は備前焼である。溝はN21°E方向のSD 3・4とN79~71°W方向のSD 5を検出した。SD 4はAW37付近から南側の調査区外へのびている(図版6-2)。規模は幅約1.5m、深さは約0.6mであり、埋土中から平安時代末～鎌倉時代前期に属する多量の遺物が出土した。SD 5は幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。平安時代前期の溝SD 8に重複し、SD 4におおよそ直交している。

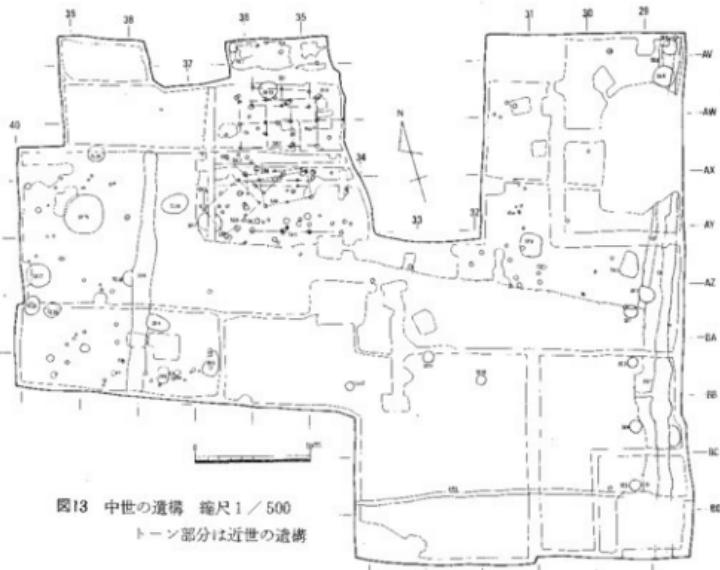


図13 中世の遺構 縮尺1/500
トーン部分は近世の遺構

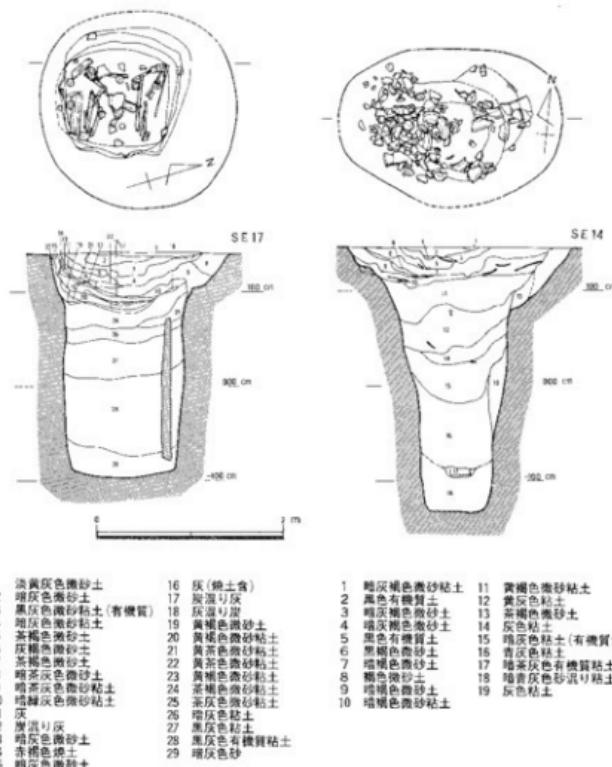


図14 井戸SE 17・SE 14 比尺1/60

6 近世の遺構と遺物

近世の遺構には第Ⅱ層下面で検出した柱群、溝、井戸、野窓などがある(図13)。また、調査区内では南北で比高差のある水田面が検出された。北側の水田面は調査区内で鏡手状に削り出された畠高地部となっている。南側の水田面は比高差約0.4mの段があり、やや湿低地気味の水田となっている。溝SD1・2は調査区東端で検出した。いずれもN19°Eの方位を示し、先述した下段の水田へ接続、もしくは引水溝をもつことから、水田用水路と考えられる。野窓SE2～5は柵柱をもち、溝SD1に沿った下段の水田東端にはほぼ等間隔に設けられている。井戸SE1・7はいずれも上段の水田の端部に設けられている。SE7の掘形底部より近世に位置付けられる灯明皿が出土している。

(山本悦世、吉留秀敏)

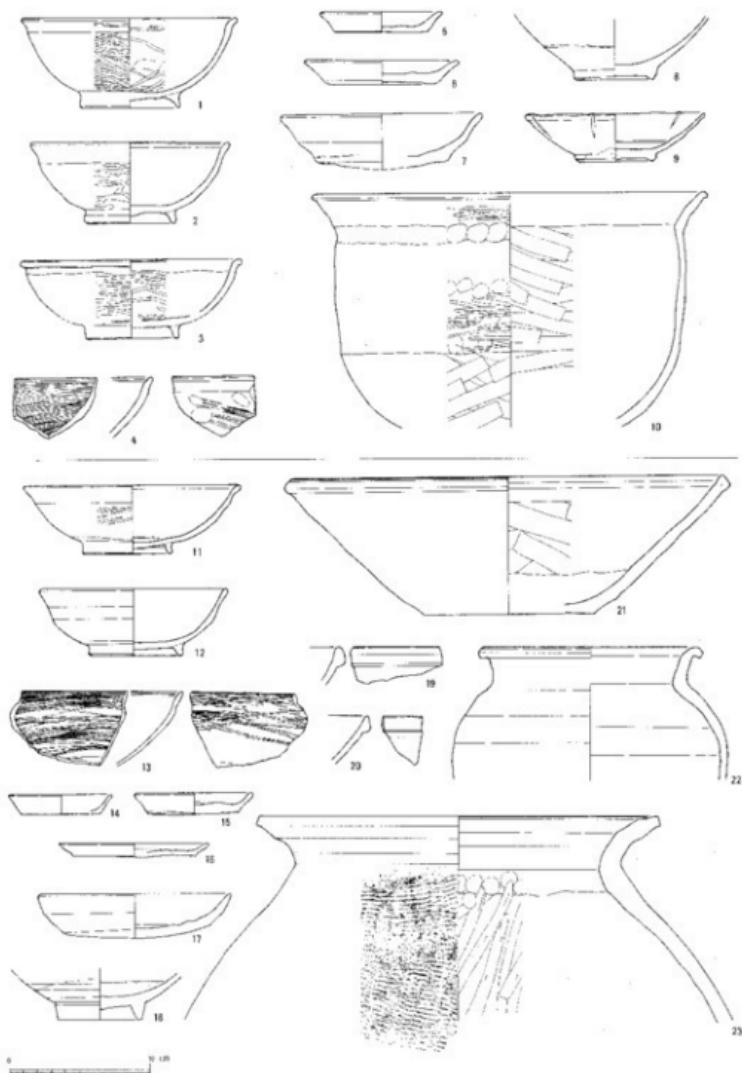


図15 SE 17出土遺物(1~10), SE 14出土遺物(11~23) 縦尺1/4

第4章 津島 BH13区の発掘調査概要

1 調査の経過

本調査区は本学津島地区南端の農学部構内に位置する。南400mには著名な津島遺跡が所在している。ここに津島地区的雑排水・し尿等の処理施設として合併処理槽が埋設されることとなり、予定地内の試掘調査を実施した。その結果、地表下約2mで弥生時代前期の遺物と溝状の遺構を検出した。協議の結果、埋設予定地全域の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は昭和58年11月14日から開始し、同月22日中断し、昭和59年1月9日に再開ののち同年3月5日に終了した。なお、調査期間中の昭和59年2月25日に排水管理設予定地関係の発掘調査と合わせて現地説明会をおこなった。

2 層序

現地表は標高3.7~3.8mでほぼ平坦である。調査地区は埋没した微高地端部の低地側にあたり、基盤層上に厚い堆積層をみる。基本的には以下のよう層序を示す(図16)。第Ⅰ層は表土および造成土である。第Ⅱ層は明治時代の水田土壌である。第Ⅲ層(黄褐色粘質土)は水田土壌の黒層である。第Ⅳ層(黄灰色粘質土)は時期不明であるが、水田土壌とみられる。第Ⅴ層(暗灰色微砂粘土)は洪水砂の可能性がある。第Ⅵ層(黄灰色粘質土)は時期不明の水田土壌である。第Ⅶ層(暗灰色粘質土)も水田土壌の可能性がある。第Ⅷ層(暗黃褐色砂)は洪水砂である。a・bに二分でき、いずれも弥生時代の遺構を覆っている。以上の第Ⅰ~Ⅷ層は調査区内で層上面がほぼ水平に堆積している。第Ⅸ層(暗~黒褐色有機質土)は、南側にゆるく傾斜しながら堆積している。本層上面で弥生時代前期を上限とする遺構を検出した。遺物は本層上部まで存在している。第X層(茶褐色粘質土)は漸移層である。第XI層(黄灰色砂)と第XII層(砂礫)は基盤層である。いずれも上面が南へ傾斜している。

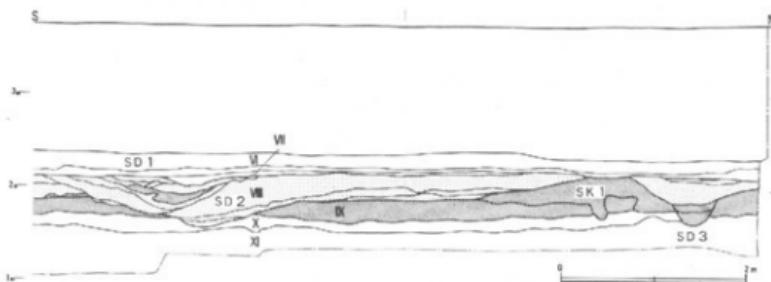
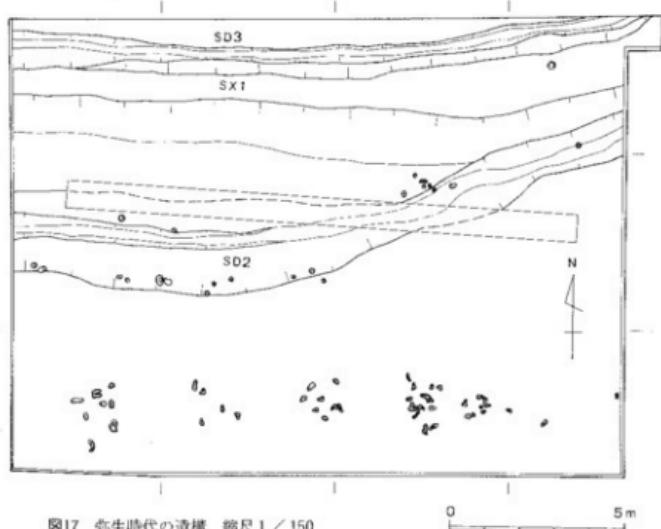


図16 調査区西壁の層序(第I~VI層上部は機械による掘削の為除去している) 縮尺1/60



3 弥生時代前期～中期の遺構と遺物

検出したこの時期の遺構は溝3, 畦状遺構1, 足跡状遺構44である。溝SD3は調査区北側で第Ⅳ層上面に検出した（図17, 図版9-1）。幅0.3m, 深さ0.2m程であり、後述の畦状遺構に沿ってほぼ東西に設けられている。溝内埋土は黒色有機質土である。溝SD2は畦状遺構の南側にあり、幅2m, 深さ0.3mを測る。溝内および周辺から小ピットを多数検出したが、性格は不明である。溝内埋土は第Ⅳ層である。溝SD1は第Ⅳ層上面で検出したもので、SD2と同じ流走方向をもち、現状で幅1.5m, 深さ0.4mを測る。溝内埋土は黒色有機質土を挟む砂層である。埋土中から弥生時代中期初頭の土器片を出土している。畦状遺構SX1はSD2・3間に東西方向に検出された。上部は後後に削平されているが、基部幅3m, 上部幅1m, 高さ0.3mを測る。本遺構は第Ⅳ層の暗～黒褐色有機質土を盛り上げて構築したものとみられる。足跡状遺構はSD2の南側の低地で多数検出した。長さ20～30cm, 幅10cm, 深さ3～5cm前後の落ち込みである。検出分では方向に規則性がみられず、また保存状態も悪く、足跡である確証は得られなかった。遺物は各遺構内および第Ⅳ～Ⅱ層で検出した（図18, 図版9-2）。土器には縄文時代晩期の鉢（1～3）、弥生時代前期の壺（4・5・8）、甌（6・7・9）などの他弥生時代中期のものも認められる。石器には石錐（10）、石錐（11）や砂岩製の柱状片刃石斧（12）などがある。

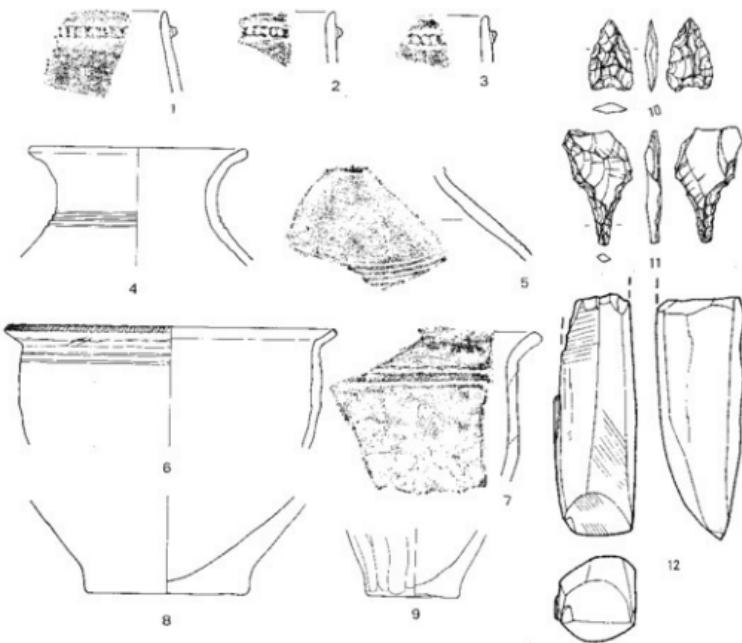


図18 津島BH13区の出土遺物 縮尺1／4（1～9）、2／3（10～12）

4 近世の遺構と遺物

図示していないが、第Ⅶ層上面において土壙2基を検出した。備前焼（すり鉢片）や伊万里焼等の磁器片などを出土し、江戸中期に属するものと推定される。

（小池伸彦、吉留秀敏）

第5章 津島 BE14・18、BF17・18、BG14、 BH13～15区の発掘調査概要

1 調査の経過

農学部構内において前掲の合併処理槽設置と共に排水管埋設工事が計画されたため、予定地内の試掘調査を実施した。その結果、後述の3地区から遺構および遺物包含層を検出したため、協議のうえ各地区の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は昭和59年1月9日から3月5日までおこなった。

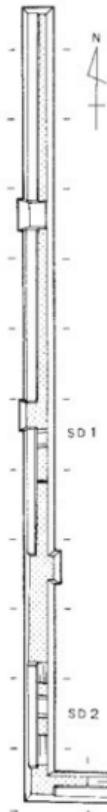


図19 A地区遺構検出状態 縮尺1/400

2 層序

現地表の標高はA地区で3.6～3.7m、B地区で4.2mと東から西へゆるい傾斜が認められる。各地区的層序は先の合併処理槽予定地の基本層序と類似し、相互の対比がほぼ可能であった。以下においては、合併処理槽予定地と共通の層番号を用いることとする。ただし、基盤が高まっているA地区南側、B地区、C地区北側では第V～Ⅷ層が存在しない。

3 A地区

調査区は遺物の出土した試掘場5～9の部分に幅約2m、総延長76mの範囲で設けた(図19、図版10-1)。調査の結果、溝2、土壌1を検出したほか、調査区南側の第Ⅹ層内から縄文晩期の土器がまとまって出土した。溝SD1は第Ⅳ層上面で検出した東西に流路を持つ幅約1.5m、深さ0.4mのものである。溝内埋土は灰白色砂である。溝SD2は微高地端部上の第Ⅹ層上面で検出した。東西に流路をもち、幅約1.5m、深さ0.3mを測る。溝内埋土は第Ⅶ層に類似する混砂である。土壌SK1は調査区南側の微高地上の第Ⅹ層上面で検出した。調査区壁にかかっているために全体は不明であるが、幅約0.7m、深さ0.6mを測る。以上の遺構の所属時期は、いずれも出土遺物が少なく明確でない。

本調査区では各層から遺物の出土を見た(図21、図版10-2)。第Ⅳ層か

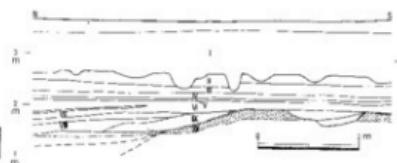


図20 A地区東壁の層序 縮尺1/100

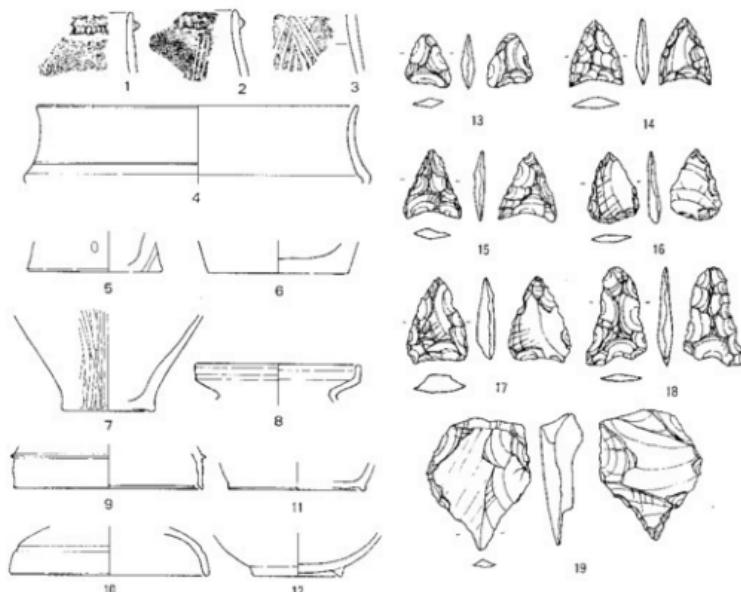


図21 A地区の出土遺物 縮尺1/4 (1~12), 2/3 (13~19)

は上師質椀(12), 土師器皿, 青磁, 石錐(15)などが出土し, 比較的中世の遺物が顕著である。第V層から第VI層では土師質椀, 須恵器杯類(9~11), 弥生時代中期~後期の土器片(5・6・8), 繩文時代晩期の土器片のはか石錐(16・17)などが出土している。第VII層から第IX層にかけては弥生時代中期の甕(7), 繩文時代晩期の深鉢(1~4)や石錐(13~14・18), 石錐(19)などを検出している。

4 B地区

調査区は遺構を確認した試掘場22の周囲に幅2.5m, 長さ5.5mの範囲に設けた(図22)。農学部本館の北東隅にあたる部分で, 付近は微高地状をなしている。本地区では第V~VII層を欠き, 第IX層上に直接第IV層が堆積している。第IV層上面の標高は約2.7m, 第IX層上面は2.5mである。調査の結果, 第IV層上面で溝1, 横状遺構1を検出したほか, 第IX層上部で弥生中期と推定される遺物が多数出土した(図22)。溝は方位をほぼ東西に向けるもので, 幅約0.15m, 深さ0.1mの小規模なものである。横状遺構との間に切り合いが認められ, より先行するものと考えられる。横状遺構はほぼN73°Eの方位を示す。柱間の距離は約0.6mと狭く, 立

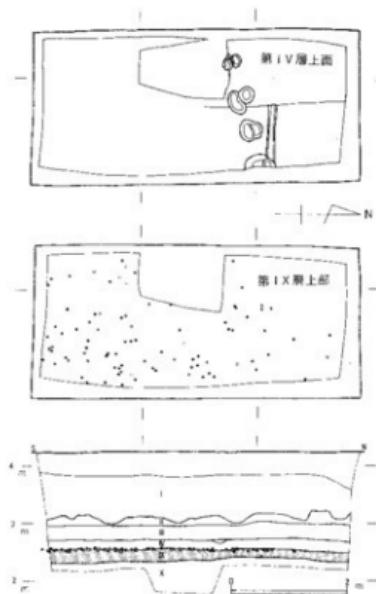


図22 B地区の遺構と遺物の出土状態（○土器等）・石器等） 縮尺1/100

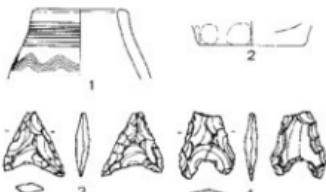


図23 B地区の出土遺物 縮尺1/4 (1・2), 2/3 (3・4)

て直しが推定される。以上の遺構は出土遺物が少なく時期は不明であるが、A地区の成果からみて中世以降のものと推定される（図版11-1）。第IX層上部では遺構や遺物の集中部分は認められなかつたが、調査区南側にやや偏って遺物が出土しており、周辺に生活址等の存在が予測される。

本調査区の出土遺物は主にこの第IX層上部のものである（図23、図版11-2）。上器には壺口縁部（1）や底部（2）、石器には石鎚（3）や多数の剥片、碎片がある。また、一点ではあるが第IX層下部から石鎚（4）が出土している。

5 C地区

調査区は合併処理槽予定地に隣接した西側部分であり、農学部運動場の東側と南側に位置する。これは遺物を出土した試掘場12~16・18の部分にあたる。調査区は逆L字状の部分と合併処理槽との接続部分とからなり、幅2m、総延長約130mの範囲である（図24、図版12-1）。なお、調査区南側は湧水と壁の崩廃のため、作業を中止した部分がある。序号は、合併処理槽と基本的に同じであるが、溝SD3より北側は敵高地となり、第IX層下面が直接第IX層や第X層に接している。ちなみに敵高地部での第IX~X層上面は、標高約2.6mであり、低地部（SD1・2以南）での第IX層上面は同約1.9mを測る。検出した遺構は溝4、畦状遺構1である（図24）。溝SD1~3、畦状遺構SX1は合併処理槽予定地から連続したものであり、SD1が第IX層上面、SD2・3、SX1が第IX層上面でそれぞれ検出された。これらは敵高地端部に沿ってやや蛇行しながらほぼ東西方向に設けられており、流路は40m以上におよぶことが明らかになった。溝SD4は図示していないが、SD3の北側の第II層上面で検出した。東西に

流路の方位をもち、幅約2.5m、深さ約0.8mを測る。第Ⅰ層の造成時以前の水田用水路と考えられるが、本溝が津島一帯に残る条里地割に合致することは留意されよう。

本調査区では、調査区南側の溝SD3周辺と調査区北端の微高地上で遺物が出土した(図25、図版12-2)。SD3周辺では、主に第Ⅹ層と第Ⅸ層から縄文時代後期前葉の土器片(1), 同晩期の土器片(2), 弓生時代前期の壺(3), 瓶(4・5)や石鏃(6~8), 石錐(9)などが出土した。また、調査区北端の微高地上では第Ⅸ層上部から弥生時代前期および縄文時代晩期の土器片、石鏃などが出土している。

(吉留秀敏)

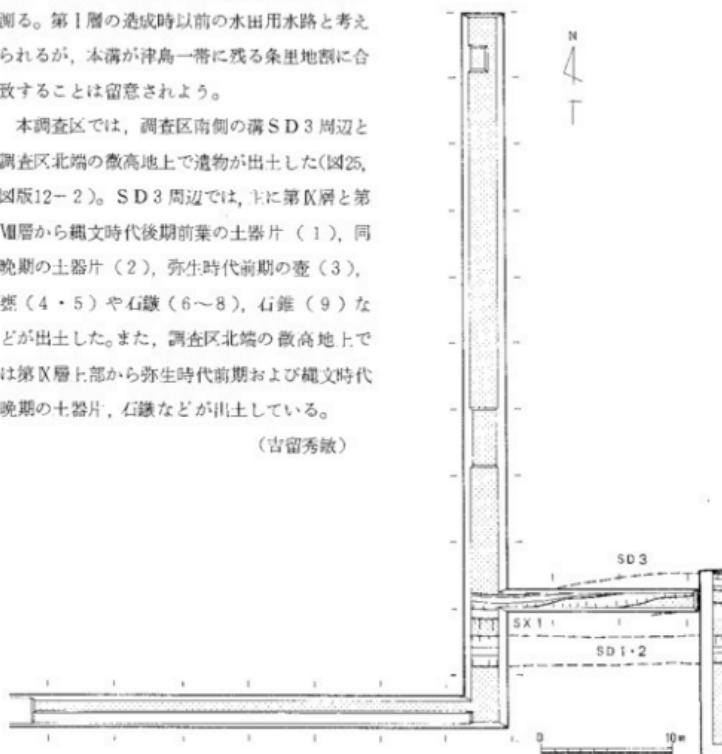


図24 弓生時代の遺構 比尺1/400

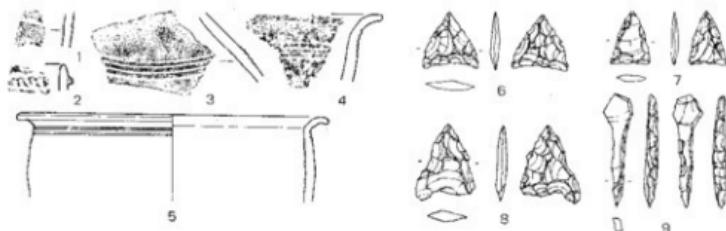


図25 C地区の出土遺物 比尺1/4 (1~5), 2/3 (6~9)

第6章 昭和58年度岡山大学構内の試掘・立合調査報告

昭和58年度に岡山大学構内で実施した試掘・立合調査について報告する。試掘調査は8件実施し、対象面積は139.5haであった。立合調査は建物新・改築に伴うものが4件、諸配管設工事が8件、橋梁改修工事が1件、その他5件であった。以上の調査結果を津島地区、鹿田地区にわけて報告する。

1 津島地区

農学部構内の排水管埋設予定地ではあわせて29ヶ所の試掘場を設けて調査した（図26）。当該地区の地表面の標高は3.5~4.5mで東から西へゆるく傾斜する。試掘場5~9は排水管A地区、22は排水管B地区、13~18は同C地区および合併処理槽に対応する（以下排水管各地区はそれぞれA・B・C地区と略称する）。これらの基本層序は前章で記述したため省略する。各試掘場の堆積状態を比較すると第Ⅲ層上面の標高差が認められる。試掘場1・2は第Ⅱ層以下の層が他の地点より高く、A地区との間に旧地形の段差が推定できる。また、試掘場3~5・9~10・12・15・17・26~29は第Ⅲ層上面のレベルが相対的に低く、その上部に砂層が堆積している。逆に試掘場6~8・18・19~25・30は第Ⅲ層上面が前者に比べ0.5~0.7m程高くなっている。試掘調査によって遺構や遺物包含層を確認した地点は、主に旧地形の高い部分からその端部に限られている。

農学部農場内では東西に約50m離れて試掘場31・32を設けた。その結果、両試掘場に同様の堆積状態が確認できた。地表の標高は3.2m程であり、層位は以下の通りである（図27）。第1層は表土（耕作土）および造成土であり、第2層は明治時代ごろの水田耕作土である。第3層



図26 津島地区の試掘調査配置図 緯尺1/7500

は水田耕作土末土の累層である。第4層以下は強粘質の粘土層であり、第5・6層中に自然流木が検出されることから水成堆積層であると考えられる。試掘場31の第4層上部に一点の土器細片を出土したが、時期等は不明である。

事務局敷地内では3ヶ所に試掘場33～35を設けた。現地表面は標高約4mでほぼ平坦である。試掘場の層序は隣接した農学部構内と同様である。試掘場33・34では第9層上面がやや高く、同35では相対的に低く砂層の堆積が認められる。試掘場33の第9層上面で土器細片を採集したほか、同35の第8・9層上面で遺構の一部を確認した。

津島宿泊所敷地内では2ヶ所の試掘場36・37を設けた。地表面は標高3.8mである。試掘場内の土層に対応する第6層の上面のレベルがC地区と比べて高くなっている。両試掘場に遺物・遺構は認められなかった。

保健管理センター改築予定地では東側に近接して試掘場38を設けた。地表の標高は約4.5m

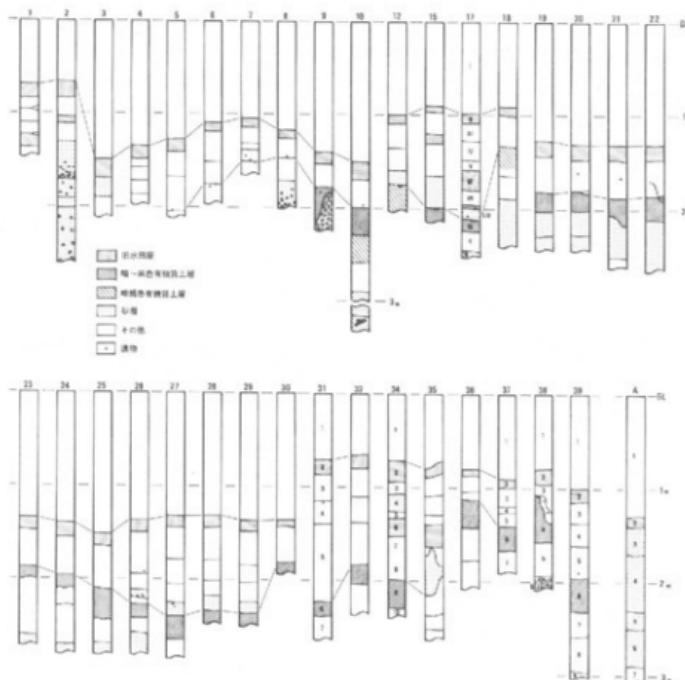


図27 試掘調査の土層柱状図 縮尺1/60

である。試掘場内の土層は次の通りである。第1層は表土と造成上である。第2層は明治時代の水田層である。第3層は水田耕作上床土の累層である。第N層は黒色の有機質上で、C地区第V層に対応する土層と考えられる。第5・6層は基盤の砂層と砂礫層であり、下位に従い礫の増加がみられる。第4層上面で溝状の遺構と土器細片を検出した。

工学部校舎敷地内では試掘場39を設けた。地表の標高は約5mである。土層は農学部農場内の試掘場31・32に類似し、次の通りである。第1層は表土と造成上である。第2層は明治時代の水田層である。第3層は水田耕土床土の累層である。第4・5層は粘土層で、下位に従い粘性を増す。第6層は黒色の有機質上で、C地区的第V層に対応すると考えられる。同層上面にわずかに砂粒を認めた。第7～9層は粘土層であり、上部に小円礫が存在する。水成堆積層と考えられる。第5層下部に磨滅した上器細片を一点検出したが、時期等は不明である。

津島地区西門橋梁改修工事に伴う立合調査では、座主川橋梁南側の関係配管埋設部分と同北側の橋げたを支える間知石と裏ごめ石の部分の掘削に対して調査を実施した(図26・A)。前者の掘削は造成土中までであった。後者は地表下2.8mまで掘削した。地表の標高は約4.2mである。土層は以下の通りである。第1層は表土(現道路)と造成上である。第2層は明治時代の水田層である。第3～6層は砂層であり、第4～5層には多くの植物遺体が含まれている。第7層は粘土層である。これらのうち第3～6層の砂層は津島地区の他の試掘場では認められず、明らかな水成堆積層とみられる点から溝内の堆積物と推定される。流路の方向や時期等は出土遺物がなく、土層観察も不充分なために不明である。ただし、現在の座主川が条里の区画に一致している点と明治時代の水田層が上部に認められることから、近世以前の用水路の可能性がある。具体的な検討は今後の周辺の調査を待たい。

2 農田地区

本地区では12件の立合調査を実施した。これらのうち10件は第1層の表土と造成上中を掘削最深面とし、埋蔵文化財への影響はなかった。外来診療棟及び旧耳鼻咽喉科棟の基礎杭保存状況確認調査では、一部を第Ⅲ層上部まで掘削し、若干の土師器片と近世の備前焼すり鉢片が出土した。

外来診療棟蒸気配管埋設工事では、地表から1.2～1.3mまで掘削した。地表の標高は2.7mである。土層は基本的に外来診療棟改築、NMR-CT室両予定地に類似する(図29)。しかし、第N層上面の標高が1.8～1.9m、第V層上面が同1.7～1.8mと比較的浅く、本地区が窪田遺跡の立地する微高地の最頂部に近いものと推定される。第V層上部には貝層が堆積している(図28、図版13-1)。調査区内からは整理箱1箱程度の遺物が出土している(図30、図版13-1・2)。多くは貝層からの出土で、主な出土遺物として分銅形土製品(1)、壺(3・4)、甕(5・6・8・9)、高杯(2)、鉢(7)があげられる。壺(3)は頸部の破片と思われる。分

図28 蒸気配管埋設予定地貝層検出状態
縮尺 1 / 200

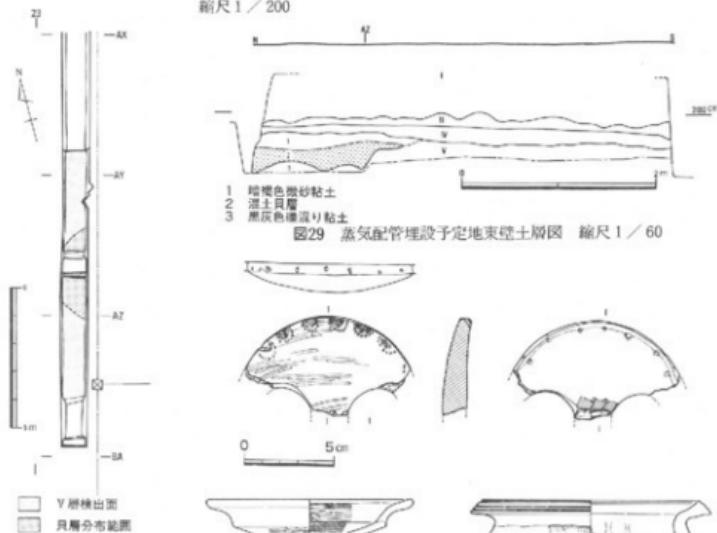


図29 蒸気配管埋設予定地東壁土層図 縮尺 1 / 60

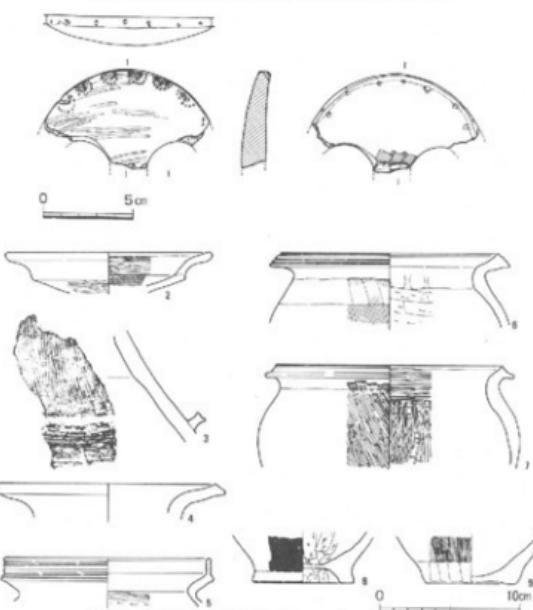


図30 出土遺物 縮尺 1 / 3, 1 / 4

銅形土製品は現存長 5.5cm、現存幅 9.3 cm、上端部厚さ 0.7 cm、中央部厚さ 1.4 cm を測る。表面は凸面をなし、方向の範磨きが部分的に認められる。また、縁辺部には櫛描小重弧文

と三日月状の刺突文が廻る。裏面は凹面を呈し、くびれ部には刷毛目を施している。貫孔は裏面から上端面に向って穿たれ、大きさ・重弧文との位置関係などは不規則である。色調は黒褐色を呈す。表面に残る様、淡褐色に変色した裏面の状況から焼成後二次的に火を受けたことが窺われる。出土遺物には、一部に弥生中期末や弥生後期末の土器片(5)も含むが、その主体は弥生後期中葉に属するものである。分銅形土製品についても、文様の粗雑化の傾向が強いことから時期的に矛盾はないと思われる。本地区は第V層上面で掘削を中止し、砂で埋め戻し

た。

(山本悦世, 吉留秀敏)

第7章 昭和58年度構内遺跡調査のまとめ

昭和58年度の調査によって得られた成果を概観し、今後の課題を提示しておきたい。

まず、鹿田遺跡では2件の発掘調査と12件の立合調査を実施した。その結果、本遺跡において、不明確ながら5面の遺構面が存在すること、その中でも弥生時代、古代、中世の3時期の遺構・遺物が豊富に存在することが判明した。なお、鹿田地区全域については不明であるが、今回の調査区周辺は微高地にあたり、基盤は砂・シルト層で、旭川西岸に発達した旧三角洲の一部と推定される。弥生時代にはこの三角洲上に集落が成立するが、当時においては、岡山平野で最も海岸線近くまで進出した集落の1つである。古墳時代には小規模な集落が営まれたとみられるが、奈良・平安時代になると企画性のある大型の建物群や井戸が出現し、集落規模が拡大する。この時期の遺物に木簡や墨書き器などが存在することから、一般集落とは性格を異にすると考えられる。平安時代後期から鎌倉時代には溝、建物、井戸などが多いとみられるが、より一層の集落の発達が認められる。本地区を含む旭川西岸南部は、駿河渡頭である「駿前国鹿田莊^{件1}」の比定地として知られており、それとの関係の検討が今後必要である。

次に、津島地区では2件の発掘調査と13件の試掘・立合調査を実施した。その結果、主に農学部構内において古地形と遺跡の一部が判明してきた。詳細については不明な部分が多いが、現段階までに明らかになった点を示したい。農学部・事務局の周囲には北東-南西方向に流路を持つ谷状の低地が、おおよそ100m間隔にあり、それらの間に比高差1m前後の微高地が形成されているとみられる。微高地の基盤は砂層や礫層からなり、旧旭川の氾濫原の一部をなすと推定される。また400m程西側の農場付近は後背湿地になっていると推定される。繩文時代晩期から弥生時代の遺物包含層は各所の微高地上に認められ、一部低地までおよんでいる。発掘調査によって微高地端部から低地にかけて溝や柱状遺構が検出されていることから、微高地上には集落が、低地部には水田が営まれていたと推定される。こうしたあり方は隣接する津島遺跡^{注2}や百間川遺跡^{注3}でも知られており、岡山平野での出現期の農耕集落の一般的景観を示すと考えられる。また弥生時代以降は、こうした微地形を削平し大規模な水田耕地を設けたと見られる痕跡がある。各時代の土地の利用形態の追求が今後の課題となろう。

(吉留秀敏)

注1 藤井駿「駿河渡頭の駿前国鹿田莊」「瀬戸内海地域の社会史的研究」1952

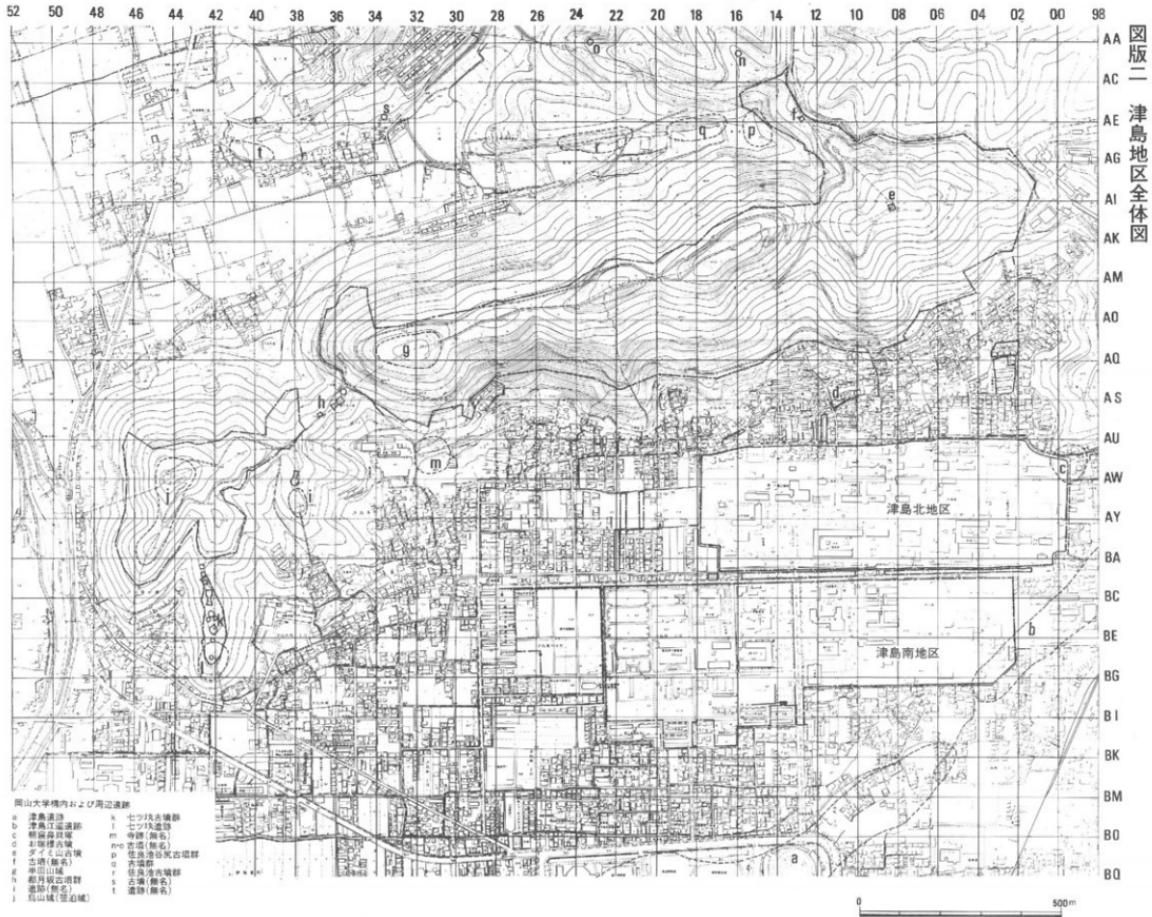
注2 津島遺跡発掘調査団『岡山県津島遺跡発掘調査報告』1968

注3 岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡』1980, 『百間川当麻1』1981, 『百間川当麻2』

『百間川兼基1・今谷遺跡1』1982, 『百間川原尾島遺跡2』1984

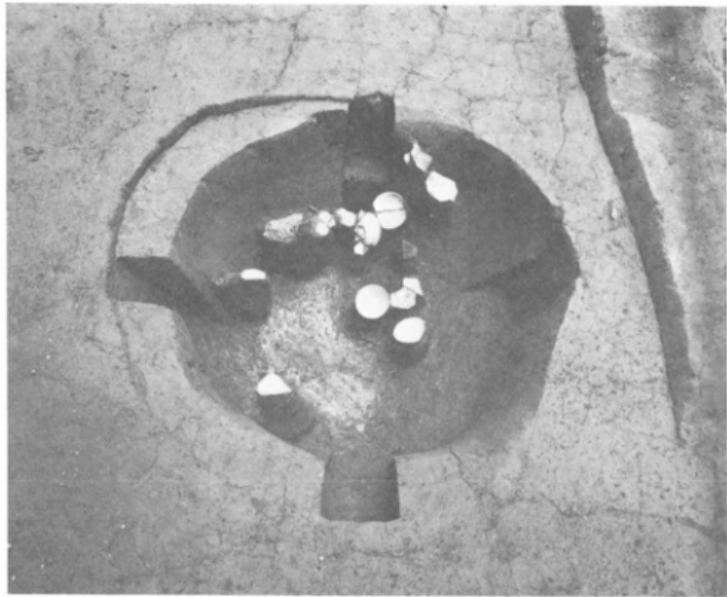
図版一 鹿田地区全体図と調査地点



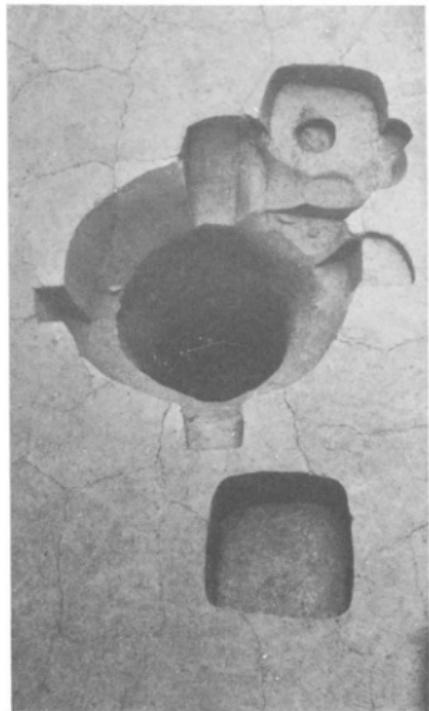




1 中世・古代遺構全景（南から）



2 井戸 SE 3 (東から)



1 井戸 SE 3 と杭列 SA1 (東から)

2 SE 3 出土遺物

3 井戸 SE 4 井筒(北から)



4 SE 4 出土遺物



1 弥生時代遺構全景（南から）



2 井戸 SE 7 (西から)

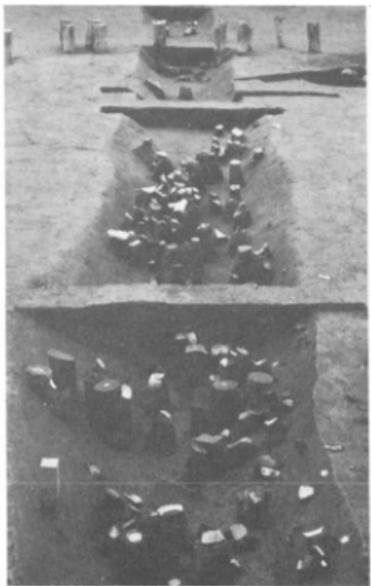


3 SE 7 出土遺物





1 調査開始段階（東から）



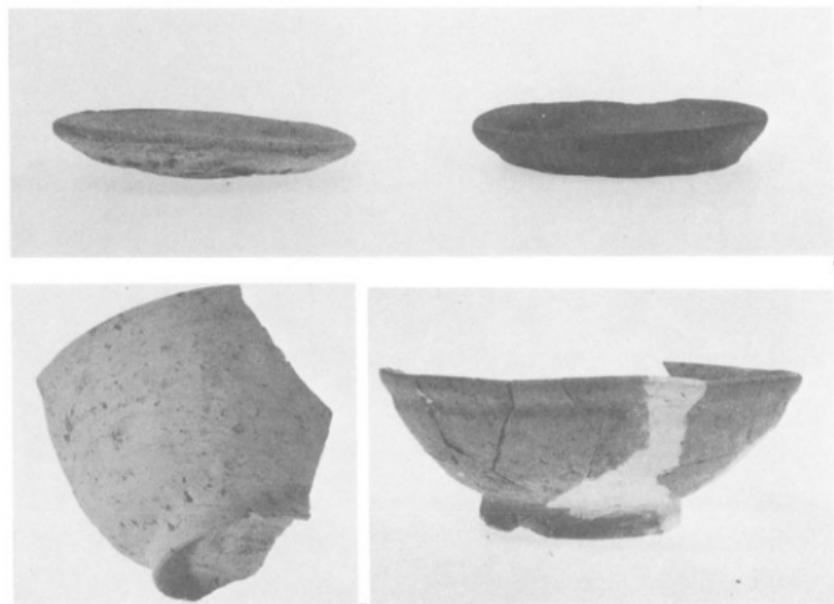
2 溝SD4（南から）



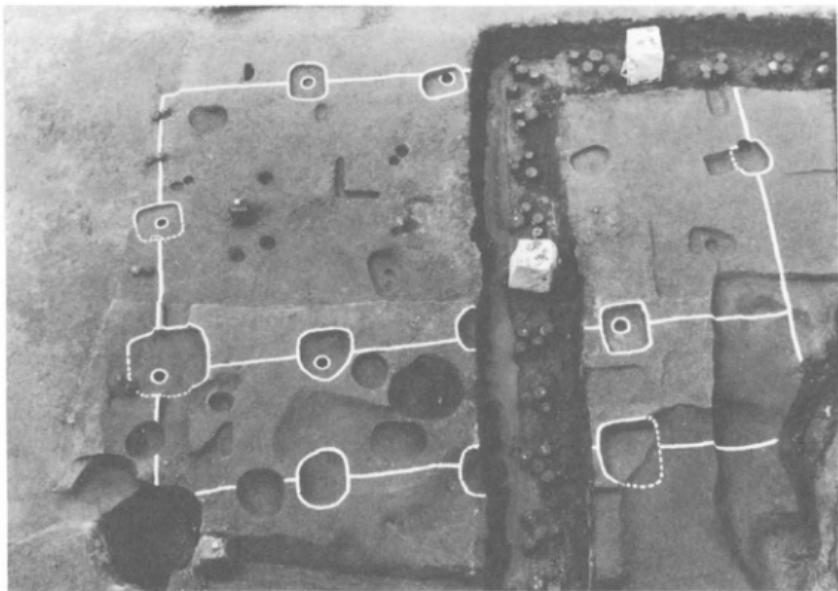
3 井戸SE14(南から)



1 井戸 SE 17井筒（東から）



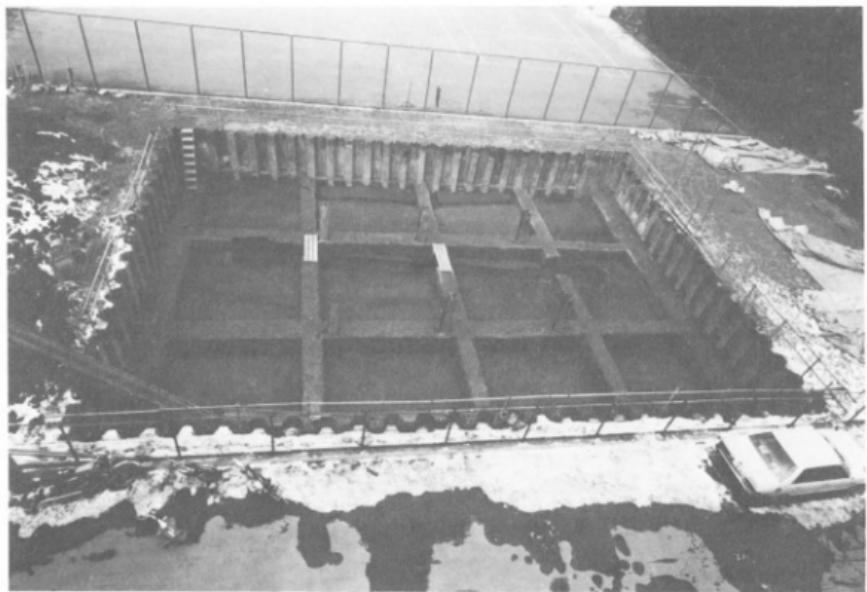
2 SE 17出土遺物



1 建物 SB 11 (東から)



2 井戸 SE 4 井筒出土状況 (西から)



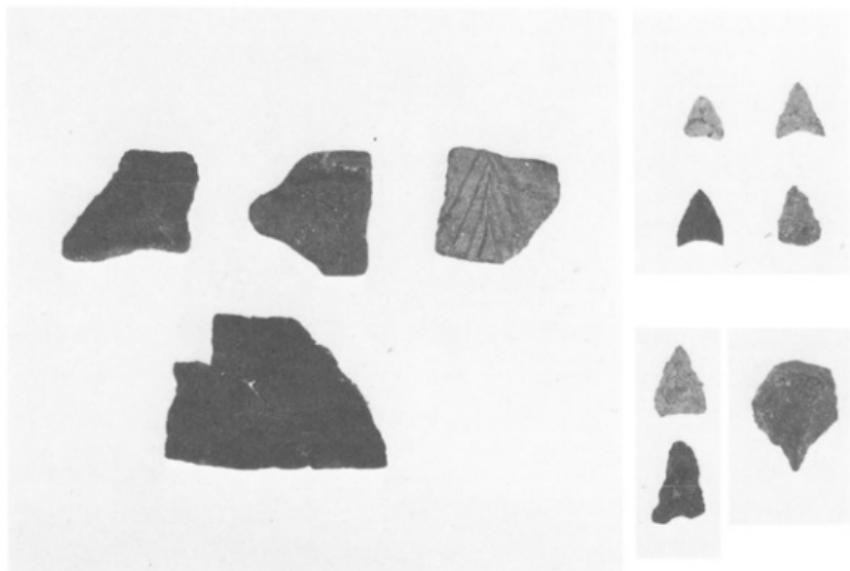
1 弥生時代遺構検出状況（南から）



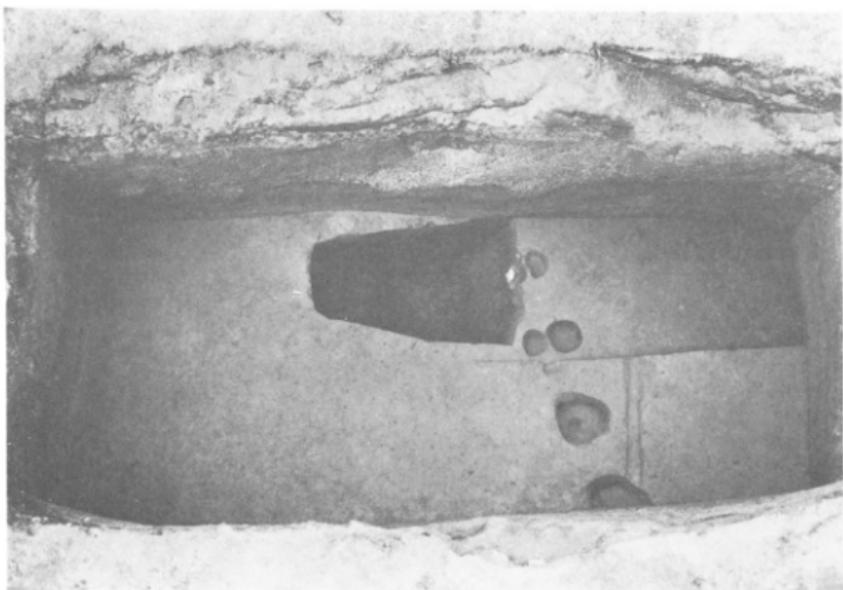
2 出土遺物



1 調査区全景（北から）



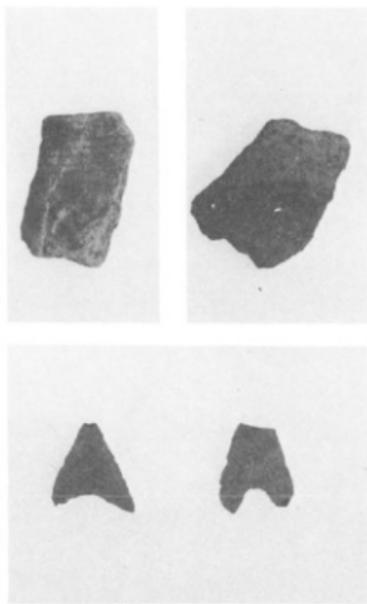
2 出土遺物



1 中世遺構全景（東から）



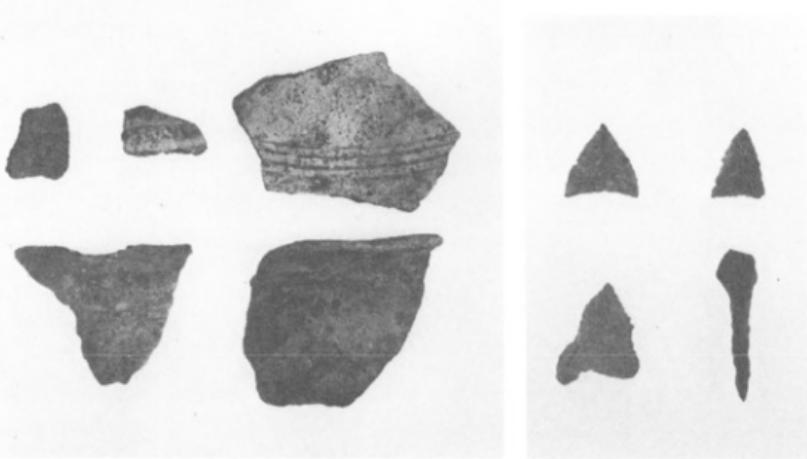
2 土層（西壁）



3 出土遺物



1 調査区全景（北から）

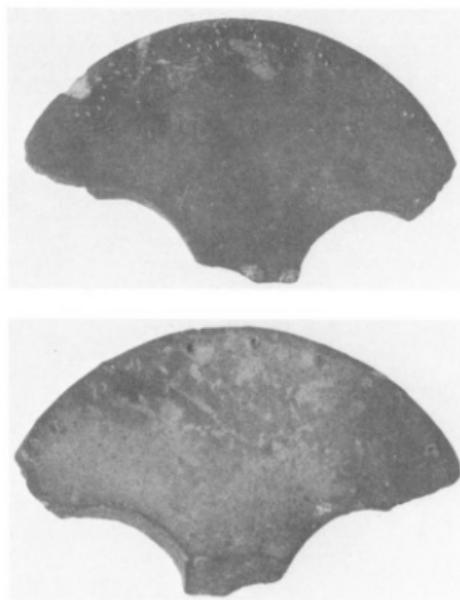


2 出土遺物

図版一三 鹿田遺跡AX-AZ22区



1 包含層検出状態(南から)



2 出土遺物(1)



3 出土遺物(2)

昭和60年2月23日印刷
昭和60年2月28日発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報1 昭和68年度

編集 岡山大学埋蔵文化財調査室
発行 岡山市鹿田2丁目5番1号
印刷 岡山印刷有限会社
岡山市南方2丁目6番20号
(0862)22-6353(代)